螢

夏の日なかのチキタリス、

釣鐘状に汗つけて

光るころもいとほしや。

またその陰影にひそみゆく

螢のむしのしおらしや。

そなたの首は骨牌の

赤いヂヤツクの帽子かな、

光るともなきその尻は

感冒のここちにほの青し、

しおれはてたる幽霊か。

ほんに内気な螢むし、

嗅げば不思議にむしあつく、

甘い薬液の香も湿る、

昼のつかれのしおらしや。

白い日なかのチキタリス。

「思ひ出」より

明治44年の月刊